

らい 来ぶらり 20

2008年

—20年後の学習院大学図書館

1 RONの将来像を発表した記事が新聞に載っていた。それによると「スーパーコンピュータから、電子文房具や家庭電気機器の中の超小型コンピュータに至るまで、1億台以上が相互に対話できるコンピュータ・ネットワークの実現をめざしている」という。

高度情報化社会といわれている今日では、いたる所でコンピュータが使用されている。普及当初は個々が独立していたものが、最近ではそれらをネットワークで結ぶようになった。そして、コンピュータは誕生以来数十年で社会・経済の構造を変えてしまった。

そのような社会情勢は図書館界にも波及し、コンピュータ化の傾向は最近5~10年間に急激に進んでいる。日本の大学図書館の約50%が何らかの形でコンピュータを導入している。文部省は学術情報センターを中心に、図書館相互のネットワークをめざす学術情報システムの構築を進めている。膨大な書誌データの共有により、文献や文献所在情報の検索が瞬時にでき、さらにその資料の相互貸借も簡単にできるようにしようとしている。

コンピュータ相互によって構築されたネットワークは、ネットワーク相互のより広範囲な世界的規模のネットワークへと進展して行くであろう。

図書館においても、近い将来ネットワーク化の発展と共に相互貸借や文献情報検索サービスなども大きく発達し、その構造や機能さえもおのずと変わって行くであろう。（和書係 中村丈夫）

2 008年ごろになると、小学校からCAI（コンピュータ対話学習）で教育を受けた人が就職をしはじめ、現在/パソコンに熱中している少年達が、社会で中堅層の年齢になる。また企業では、先端技術の開発と複合技術による応用が重要となり、情報サービスの価値が増大するであろう。

そのような時代では、異なる専門分野を理解する力が求められ、今以上に個人の生涯教育が重要になる。人々は求めるさまざまな情報を、銀行のキャッシュディスプレイを使うような感じでどんどん使いたいと思うようになるであろう。

これからのメディアの発展により、1次情報（図書・雑誌・論文等の原資料）は、ほとんどフルテキストという形で電子媒体化（テキスト・データベース）され、機械検索できるようになってくる。また、図書館の目録（書誌情報）は、学習院だけではなく、全国的またはグローバルなレベルでオンラインのアクセス目録となる。利用者は1台のワークステーションで、これらの書誌情報やテキスト情報だけではなく、さまざまな画像情報も入手できるようになるであろう。このように多様なデータベースへのアクセスを、簡単に可能にする人工知能的なソフトウェア（インテリジェント・ゲートウェイ、またはトランスペアレントといわれている）が開発されていると考えられる。

大学図書館は大量の情報をストックする機関、情報アクセスを保障する機関として、かなり趣を異にしているはずである。（運用係 入村和彦）

異文化を知る



異文化を知るのにカナダの典型的な大学を訪ねてみましょう。そこで、西海岸のバンクーバー市内にある私の卒業したプリティッシュコロンビア州立大学(UBC)を紹介させていただきます。

都心部でUBC行きのバスに乗れば約30分で大学の門に着きます。そこから、両側にゴルフ場と森のある細長い道を走り、キャンパスに近づくと住宅街、お店、大学病院などが見えて来ます。キャンパス内の停留所に到着すると学生でいっぱいだったバスがあつという間にすいてしまいます。私たちもここで降りてみましょう。

一番最初に感じるのは半島になっているこの大学の広さでしょう。学生25,000人もいるこのUBCはとにかくスケールが大きいのです。あちらこちらから近くの海と山の素晴らしい景色が見えます。緑の多いキャンパスには、教室などのほかに教会、博物館、植物園、日本庭園もあります。端から端まで歩くのに45分もかかるので、中央キャンパスだけ回ってみましょう。

バス停のすぐそばに体育館、プールそして学生会館があります。平日だと学生は数時間プールを自由に利用出来ます。お金を少し払えば体育館で体操、テニス、剣道も習えます。さて、学生のたまり場になっている学生会館をのぞいてみましょう。学習院の輔仁会館と似た感じで、中には食堂、レストラン、パブ、売店、銀行、旅行会社などが営業していて、大変便利な所です。ここに集まっている人々を見ると、ヨーロッパ系の人もいれば、インド系、東洋系などの人もいます。カナダは移民の国ですから、キャンパスや街で耳を澄ますとフランス語、アラブ語、中国語、たまには日本語も聞こえてきます。もう一つすぐ気をつくことは、学

生の格好でしょう。しゃれた格好をしている人はきわめて少なく、女子大生でもジーパンやトレーナーを着ている人が多いのです。これはどういうわけだかわかりませんが、勉強しているときは着ごちの良い服ならどんな格好でもいいという発想でしょう。学校の雰囲気は一般的に日本の大学よりまじめなような気がしますが、日本の大学生と同じようにカナダの大学生もおしゃべりが好きで、よく笑顔を見せてくれます。

学生会館を出るとすぐ北の方に25階建てのビルが2つ並んでいます。これは寮の一つです。部屋は狭くて食事がまずいという評判ですが、教室と図書館に近いので場所としては最適でしょう。今度は西の方にある中央図書館とその向かいのundergraduate(大学生用)libraryを訪ねてみましょう。宿題をするのには大学生用の図書館が明るくていいけれど、真剣に研究をしたいときには中央図書館の方が静かで資料が多いのです。どちらにしても、直接書庫に入って自分の探している本を取ってからコンピューターで借り出します。

学年は9月から4月、つまり7カ月の期間ですが、早く単位をとりたい学生のために春と夏の集中コースもあります。しかし、ほとんどの学生は長い夏休みを利用して、学費と家賃が払えるようにアルバイトをします。full-timeの学生は科目を5つ選んで、週15時間授業に出ます。中間試験と期末試験も2回ずつ行います。日本の受験生と同じように競争が激しいけれど、クラブ活動やスポーツの試合などもあるので、ほとんどの学生はバランスをうまくとっています。毎年11月と5月には、みんなが期待している卒業式が行われます。4年間の勉強を終え成長した学生は、ここから将来へ出発します。

ところで、UBCの大学院には留学生がたくさん来ていますから、学習院の皆様もいかがでしょうか。(国文学科 委託生 アン・ブライス)

図書借り出しの最長記録は、米国のシンシナティ大学医学図書館で1823年に貸し出した本が、1968年に返却されたという例がある。1805年にロンドンで出版された『発熱性疾患』という本で、借りた本人の曾孫にあたるリチャード・ドット氏が返却した。罰金の2,264ドルは免れた。(『ギネスブック '86』より)

書物の風景——19

今回紹介するのは、江戸時代の百科事典『和漢三才図会』(中央図書館所蔵 正徳3年(1713)序)。その名の示すとおり図入りの百科事典である。編者は寺島良安。彼の経歴等については不明な点が多いが、医師として大坂に住み和氣仲安に学び、御城医となり法橋に叙せられた。号を杏林堂という。

良安は師の「医者たる者は宇宙百般の事を明らむ必要あり」、つまり良医たるべくは、広く天人地の三才に通じる必要があるという言葉に従い、この書の著述を計画した。30余年の歳月をかけ正徳2年(1712)ころ完成し、大坂杏林堂より刊行された。

この書は、天人地の三才にわたる内容を持つ105巻81冊に及ぶ大著である。書名は明の王折編の『三才図会』による。部門は96部と

和漢三才図会



しているが、中国の順序によらず天から人倫にとび、諸器物、生物、最後に地理(和漢)としている。巻1天部から巻105造醸類まで天人地にわたる万物を掲げ、それぞれに絵図を付して、和文の読みと漢文の解説を付けている。たとえば、「百工具」の「規」の条には

「ぶんまはし。唐音クイ。俗云不無末波之。根発子。規、為員ス之器也。云々」とある。コンパスの語が見えるのが興味深い。また、漢文体でも分かるように通俗書や啓もう書のたぐいではなく、日本最初の大百科事典とされるにふさわしい好著である。江戸時代から明治までよく利用され、現代においても当時の事物を調べる根拠とされている。

なお、この書の活字本が全18巻の予定で「東洋文庫」(平凡社)として刊行中であり、図書館でも所蔵している。(和書係 小林邦子)



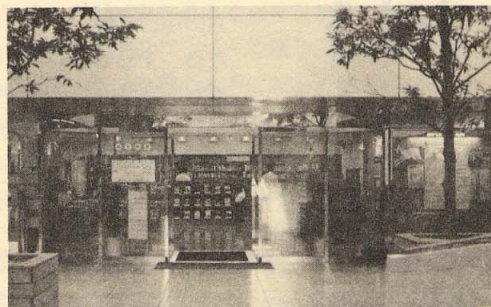
コンニチワ!

豊島区立 雑司が谷図書館

ご存じですか? 学習院大学から一番近く一番新しい公共図書館。もう、お出かけになりました?

豊島区立雑司が谷図書館は千登世橋教育文化センターの地下1階。明治通りに面した白い建物で体育館の丸屋根がちよっぴりおしゃれ。千登世橋に立てばすぐわかります。学校からですと、行って帰って15分、欲しい本を借りて来るのに30分もあれば十分という近さです。

開館は昨年(2003)の10月。まだ、3ヵ月しかたっていない。ですから、館内の本はどれもこれも新しくきれいな。同じ借りるならこの図書館で……とい



開館して3ヵ月、ピカピカの図書館

う気になります。誰も借りたことのない本を真っ先に自分が借り出して来るのは、なかなかの快感ですし……ネ

学生証があれば、その場で利用証を作ってもらえます。いかがでしょうか? 一度、お昼休みにでも、ぶらっと足を運んでみては……

☎03(590)1254 開館時間: 9:00~19:00(土・日は17:00) 休館日: 月曜・第3日曜・祝日

(国文学科4年 山田裕子)

参考室あれこれ

参考室の百科事典コーナーには各国の百科事典が置いてあります。新しいところでは昭和61年度の卒業生から寄贈された『Encyclopedia Americana』1986年版です。その隣りにあるのが『Encyclopædia Britannica』で、書庫には1771年の初版や、その後のブリタニカの原形となった9版(1889年に索引ともて24冊で完成した)もあります。丸善が1902年に『大英百科全書』として予約販売したのがこの版で、11版とともにブリタニカの最高傑作といわれています。その外に10版、そしてアメリカの出版社に買収され全面改定された14版、さらに現在の15版とそろっています。ブリタニカの背面の書棚には『Der

Grosse Brockhaus』があります。これも1833年に発行された8 Originalauflageから各版があります。この事典の特徴は索引がないことです。その代わりに参照が行き届き、関係事項を引き出せるようになっていきます。これで記事の重複をなくし項目を独立させています。また参考文献を付した項目が多いのも特徴です。この事は人名辞典でも言えますが、人名の項目には著作が載っています。これが意外と役立つ。先日も「F.シュトリッヒの『ゲーテと世界文学』の原書を探していますが書名といつごろ出たかがわかりません」との質問あり。そこで『Meyers Grosses Taschenlexikon』の彼の項目をみると、『Goethe und die Weltliteratur』1946年の著作として載っていました。(参考係 甲斐静子)

Utlas Anymore? (part2)



2階カウンター前の洋書目録カードをひくと、チラホラとコンピューター出力によるカードが見えはじめていますがお気づきでしょうか?前号でも紹介しましたが9月からオンラインによる目録作成を開始しています。端末機を前に、幾度かの悲惨な悲喜劇を繰り返しながら6人の個性豊かな洋書係一同は、研究室の方々の暖かい励ましや、図書館の仲間の協力を支えに奮闘努力の毎日が続いています。請求書の額におびえ、時ならぬおたけびを発しながら、1日も早く、1冊でも多く皆さんのお手元に本を届けたいといういちげな心意気はついに業者を動かし、未発表のバッチ処理の方法を一足早く教えてもらう事にもなりました。コンピューター業界の聞きしにまさる開発の早さに驚きつつも遅れてはならじ、臆してはならじと涙の自主トレが今も繰り返されています。端末からのAnymore? という問いかけを華麗にさばけるようになるのは、そう遠い日ではなさそうです。(洋書係 中村清子)

お知らせ

○試験シーズン来たる

年も明け、学年末試験ももう間近。図書館が最もこみあう季節です。冬休み前に貸し出しを受けた本は、返却期限に遅れないようにしましょう。

○学年末の開館および閉館について

◆開館日(日曜・祝日は休館) (開館時間)

1月8日-2月10日(平日 8:50-18:30)

(土曜 8:50-16:30)

2月12日・3月1日-3月31日

(平日 8:50-16:30)

(土曜 8:50-12:00)

◆閉館日

2月13日-2月29日

(蔵書点検および入試関係業務を行うため)

来びらり No.20 1988年1月1日発行

発行責任者: 森永毅彦 編集委員: 北村 誠 中野里美

学習院大学図書館 〒171 東京都豊島区目白1-5-1 ☎(986)0221